

# MONTHLY SELECTION 今月の一品

文・水沢 勉

(神奈川県立近代美術館 副館長兼企画課長)

## エラン・シャキネ

バルーン 2010年

cast bronze, car paint, plastic rope  
撮影：水沢勉（著者）

\*コンテンポラリーアートフェア「Fresh Paint 3」（5月5日～8日・Warehouse 1、Old Jaffa Port、テルアビブ）より



Eran Shakine

1962年イスラエル生まれ。84年Wizo Art School（イスラエル）修了、87～92年カレル・アペルのアシスタントとしてニューヨーク滞在。現在テルアビブ在住。

## 見

かけはただの風船玉である。とくに際だった点があるわけではない。とはいえ浮いてはいない。どうみてもその壁に掛けられている。あたりまえとはいえ、ちつとも動かないからだ。

この見覚えのない風船玉に、わたしはイスラエルのテルアビブで出会った。今年3回目を迎えたアートフェア「フレッシュ・ペイント」。以来、気にかかって仕方がない。どこかに行ってしまったのではないか。それともとても重くて、落ちてしまったのではないか。

ブロンズで铸造され、車に使用される焼き付け塗装がほどこされている。ちなみに作者によれば、その色はメルセデスベンツのメタリック系のものであるという。が、ベンツをつい忌避してしまうわたしは、データを詳しく聞いたところですぐに記憶から抜け落ちてしまうにちがいない。

しかし、それにもかかわらず、この作品が不可思議な訴求力を保ちつつけている秘密は、おそらく、彫刻の要諦を押さえているからであろう。風船という頼りない量が、ブロンズに铸造されることによって、へんな言い方だが、頼りがいのある量に変身する。しかし、形状の観念連合は、あくまでも頼りない風船玉のまま。とはいえ、なんとも「高級感」漂う仕上げ。ちょっとシニカル。しかも、ちゃんとマルセル・デュシャンの傑作「50ccパリの空気」（1919年）へのレファランスにもなっている。

作者は、1962年、テルアビブ生まれ。ニューヨークでカレル・アペルのアシスタントとして修業して、現在、テルアビブを拠点に活躍。精神療法の対話を基にする、さりげなく心の痛点を刺激するデッサン・シリーズも素晴らしい。

(みずさわ・つとむ)